

賦史に於ける班氏「紀行」二賦の意義

原田直枝

『文選』は卷九、十に亘って「紀行」という分類のもとに、計三篇の賦を収める。今これを便宜「紀行賦」と呼ぶこととする。卷九に収めるのは、班彪「北征賦」、班昭「東征賦」の二篇であり、潘岳「西征賦」一篇のために、卷十をまるまる割いている。『文選』では作家名を「班叔皮」「曹大家」と記すが、これこそは班彪、班昭の父娘の名を連ねているのである。昭明太子主宰の文人サロンが、数ある文学遺産から選りに選って、一篇の無駄もないはずの詞華集『文選』に、二篇を並収しているからには、個々の作品の上に捨象し難い文学的価値があるであろうことを予測させる。そして、班氏父娘の時代を二世紀近くも隔てた晋の潘岳「西征賦」を収めた意図は、何であったのか。紀行賦三篇それぞれを詳細に検討すると共に、これを通時的な流れとして理解するならば、さらには辞賦文学を考える一端とできるものとする。その第一段階として、ここでは班氏父娘の紀行賦二篇について考察を試みることにする。

一 紀行賦の特性——『文選』配列を中心に——

紀行賦とは、そもそもいかなるもので、辞賦全体の中で、また文学全体の流れの中で、いかなる位地を持つものだったのか。遍歴遊行をうたった文学とだけ言うなら、屈原「離騷」の天界彷徨などが直ちに想起されようが、これは紀行の作品には入らない。凡そ起点あり終点のある旅征の実際に取材してこそ、紀行賦なのであって、このことは紀行文

学全般の前提と見てよいと思う。

さて、『文選』の配列に従って賦を追っていくと、「紀行」の特色は、いかにも顕らかである。「京都」に始まり「郊祀」「耕籍」「畋獵」次いで「紀行」が置かれ、後には「遊覧」以下十の類目が続き、「情」で締め括られる。『文選』編纂に当たって、この紀行を挟んで、収録する辞賦に向ける編纂者の視点に、二度の転換が起きている。すなわち、「紀行」の前後に溝を、私は見出すのである。さらに「紀行」以降の十目の中でも、「鳥獸」までと「志」以下との間にも溝はある。「紀行」より前に分類されるのは概ね後漢の作品で、晋の潘岳、左思の作をも含めて、いわゆる「漢賦」らしい賦、という印象を与えている。「紀行」より後、さきの「志」「哀傷」の前までは、魏晋以降の作ばかり密集して、これまた、いかにも「辞賦」文学の本来然とした観がある。こうして『文選』の類目のみに従って大別してきて、それが劉勰『文心雕龍』詮賦に説く、「京殿苑獵、述行敘志」、「草區禽族、庶品雜類」なる辞賦の題材別分類に符合するところが思い合わせられよう（訓みは興膳宏『文心雕龍』世界古典文学全集25 筑摩書房に拠る。以下同じ）。劉勰言う「京殿苑獵」を写した「殷人の頌」^{ほめつた}的賦は、『文選』の「紀行」の前に、劉勰言う「草區禽族、庶品雜類」を写した「小制」の賦は「紀行」の後に、それぞれ該当する。しかるに、劉勰言う「述行敘志」の「楚人の賦」^{なごうた}的賦に当たるであろう辞賦群だけが、明らかに分散してはいないか。これは、他でもない、「紀行」の賦が、「畋獵」と「遊覧」との間で異彩を放っている事と、軌を同じくするもので、紀行賦を考える根本となる。『文選』編纂者が軽々しい配列を行なったはずはない。「紀行」の類目を、この位置に立てたのには相当の判断を伴ったであろう。今、その意図を推測するが、一言で言うならば、紀行賦は、全く新しい形の発展の可能性を備えた分野の辞賦だったのでなかろうか。

京殿苑獵の、いわゆる「漢賦」にしる、草木鳥獸の詠物賦にしる、執拗なまでの畳みかけの表現の上に成り立っている。辞賦文学の最大の特長を、列挙の文学である点と見る（吉川幸次郎『歴代賦彙』影印本解説——一九七四年中文出版社刊

同書附一参照)なら、この二系統の賦は、その点に於て相似して辞賦の本流を行くものと言えよう。無論、両者とも、「列举」の一事に尽きるような、単純な文学などではない。ところで、この言辞の列举とも密接なのであるが、京殿苑獵賦、詠物賦、と分類される作品に於ては、賦家の目は固定したままである。京都けいとを讚える際に、賦家の目は終始、嘉すべき都の上に釘づけになっている。たとえ語りは古聖賢の世に及んでいても、作家の目に映っているのは常に都である。同様に、動きのありそうな「畋獵」とて、賦家の目に映る畋獵の場面そのものに一定の枠があって、拘束を受ける点で変わりはない。辞賦の主流を成す賦は、このように限界ある対象を表現するのに、雕琢の限りを尽くした産物であるところから、どうしようもない息苦しささえ感じられてくるし、また、披露すべき他者を意識して製作された、という推察をも招くのである。

ところで、「紀行」の「北征賦」「東征賦」に入ると、俄かに小ざっぱりとする。まず、比較的比較的に小品である。畳みかけるような言辞の列举形式が止む。極めて素朴な口調、とも言えよう。班氏父娘は、自らのために表現している。普通、表現には伝達の目的や対象が伴うものだが、実際には、彼らの心情表白、叙述は、必ずしも特定の伝達対象の想定を要しないほどに自然である。「北征」「東征」二篇を見た限りでは、紀行賦は、とかく辞賦について言われがちな公的性格を脱している。つまり、予め公表を念頭に置いての対他的衝動以前に、現在、この場、に於ける個人の心の内に納めておくには余りある、心情吐露の欲求から成る結果としての、表現なのではないか。交通をはじめ、諸般不備であった後漢初めに在って、恐らくは人生の一大事であったろう旅征。そういう非常の体験に遭遇したことが、他の辞賦群とは異色の、在来の手法に捉われない紀行賦の創作を可能にした、と私は考える。「文選」紀行賦の前後に見出した溝は、まさにそこに由来するものであろう。日常に在る限り、文人は諸々の規制からは分たれ難い。「高きに登りて能く賦するものは、以つて大夫と爲る可し」(『漢書』藝文志)と班固が言うように、公的性格を具えた文学として成ってきた辞賦

では、なおさらである。今、否応なく「日常」を離れることによって、皮肉にも人はその人たるを得た。勢い、その作品も、解放状態ならでは、独自の境界を拓くことになったのである。

しかし、このような場を得た、という偶然ばかりに止まらず、その際、賦家が大膽な意趣を凝らすことをゆるすほどに、紀行賦自体が未開拓の分野であったことを、「北征賦」に照らして述べてみたい。

二 「北征賦」——紀行賦の確立——

紀行賦の歴史はそう古くはない。後漢初めには、全く斬新な分野だったに違いない。前漢、後漢の交を、文学史の一つの転期と位置づけ、後漢に於て辞賦文学の題材が種々の方向に延長した、その一例として班彪、班昭の紀行賦が、前掲吉川幸次郎「〈歴代賦彙〉影印本解説」に言及されている。

今、「北征賦」を李善注によって丹念に読んでみると、『史記』『漢書』『楚辭』『毛詩』という、出典としての頻出が自明と言えそうな典籍名に混じって、劉歆「遂初賦」を四箇所も李善が引いているのが目立つ。因みに『藝文類聚』巻二十七「行旅」（紀行賦は『藝文類聚』『歴代賦彙』では「行旅」に入る）では、第一番にこの劉歆、字は子駿（二三三年卒。改名して秀）、の「遂初賦」を掲げ、次に「北征賦」を収めている。文学として鑑賞に堪えるだけの紀行賦の歴史は、前漢末期に溯るのがせいぜいのところ、と見て差し支えあるまい。

未開拓な分野。北征当時（更始年間、二三―二五年）、二十代に入ったばかりの青年だった班彪、字は叔皮（三二―五四年）、が野心的文学を自在に実現するのに、それは格好な舞台であった。実際に「遂初賦」を検すれば、確かに、李善の指摘した部分以外にも、班彪が「北征賦」を作るに当たってモチーフにしたことを予想させる表現が、かなり多い。ただ、班彪は、専ら修辭の上での踏襲に徹したのではなからうか。表現しようとする情は、全く彪個人の体験からしか生じよ

うのないものだった。表現形式の上で、前漢末期、父親劉向と二代に亘って学問の世界で鳴らした劉歆の、在来の辞賦とは一味違った「遂初賦」を模することが、若き彪に於ける一つの創作的野心の現れだったのである。両篇を較べると、同じく羈旅を主題にしても、「北征賦」の方が、より実体験を匂わせ、より聚密で、語句の歯切れがよい。はるかに読む者を魅きつける力が強い。

「北征賦」の魅力とは何か。まず、眼前の社会情勢に対する識見を踏まえながら、叙事と叙情との、どちらにも偏ることをせず、志、情、事、の諸要素の融合した美の世界を形成している点である。かつ、徹底して饒舌を排し、経学に基づく言辞を中心に、選り抜かれた修辞でまとめられている点でもある。「北征賦」は、とにかく緊密に集約された辞賦であって、私は、そこに、後世の詩のさまざまな分野へと開花し得る因子を感じるのだが、錯覚であろうか。例えば後半、「高平に墜りて周く観る。山谷の嵯峨たるを望んで、野も蕭條として以て莽蕩し、千里を廻かにして家も無し。風森発として以て漂遙とし、谷水灌いで以て波を揚ぐ。雲霧の杳杳たるを飛ばし、積雪の皚皚たるを渉る。鴈邕邕として以て羣れ翔り、鷓鴣鳴いて以て啾啾たり。」の一段は、彪の心を透過した叙景部だが、山水詩に近似した趣がある。「北征賦」は、後漢成立当初の辞賦文学の水準を相当上回る、言うならば文学史の時代を先取りする作であった。作品自体がそうであると同時に、分野を超えての文学全体の発展の可能性への示唆をも与えているかに見える。紀行を題材に賦を作る試みは、劉歆「遂初賦」によって、一応の文学的水準に達した。それを享けて、さらに『文選』の賦に「紀行」の類目を立てさせるほどの魅力を具えた文学に高め得たのが、「北征賦」であった。二篇の賦の関係をどう考える時、『文選』で紀行賦の頭に「北征賦」を載せた編纂者の意図も、自ずと察せられてくる気がする。

では、班彪の示した「発展への可能性」を、同時代人や後輩たちは、どう継承したのか。それとも継承しなかったのか。次代の代表、という観点からも、ここで班昭「東征賦」を詳しく検討してみることは意義深い。

三 班昭——班氏の学問——

班昭、すなわち曹大家の伝は、『後漢書』列女伝に最も詳しい。字は恵班、一名を姫とも言う。推定では、光武帝建武二一年（四五年）生まれで、二人の兄、班固、班超とは十四歳の隔たりがある（鄭鶴声「班孟堅固先生年譜」による）。十歳で父、彪と死別し、十四歳で、同じ扶風郡（陝西省咸陽県）の曹寿、字は世叔、に嫁した。その夫が早逝してからは、貞節を守って行い正しく暮らした。班家の、前漢末から後漢へかけての時代に於ては最高度の、学問的環境の中で育った彼女のこと、学識博く才長けていること言うまでもない。兄の班固が『漢書』を著しながら、志半ばにして倒れた後を、和帝の詔によって継承し、完成させた。班固に於て「八表」と「天文志」とが未完であったと言う。

ここで班氏の学問ということについて触れておきたい。班固撰『漢書』があまりに偉大なこともあって「史家」としての班氏、は常識となっている。班氏の人が、他に並ぶ者ないほど史に長じていたことは確かであった。だが、それ以前に、まず、班氏の学問とは経学そのものだったのではないか。前漢最末期、前漢までの学術諸般を整理総括した劉向・劉歆父子の功績を、後漢経学者へと橋渡しした者として、班氏父子を位置づけるのは、無理とは思われない。班固は『漢書』芸文志で、『史記』を「六芸略」に入れているが、この「六芸略」とは、後の四部分類に於ける「経」「史」に相当する。これこそ、班氏が、史を併せて、あくまで経学に根本を置く学問の家であったことを物語るものである。そして、班彪をはじめ、班固も班昭も、その経学に根ざした文学者であった。班昭一人に限れば、「列女伝」に次の一条がある。「時に漢書始めて出で、未だ能く通ぜざる者多し。同郡の馬融、閣下に伏して昭に従ひて讀を受く。後に又融の兄續に詔ありて昭を繼ぎて之を成す」と。後漢期の、鄭玄を頂点とする経学確立期に先立つ学者として、馬融は重要極まりない。班彪、班固亡き後、前漢以来の班家の学問を継承した人物として、班昭が、記事は『漢書』伝授の

みへの言及であるにせよ、馬融との接触を持ったという事実は、あまり知られていない班昭の学問を考える上で、大きな材料となるのではなからうか。

また、後漢の宮廷は学問熱心であつて、和帝は、皇后はじめ後宮のやんごとなき婦人方の師匠として班昭を重宝した（内藤湖南「支那中古の文化」『全集』第十卷二六〇ページ筑摩書房参照）。「大家」という婦人の尊号で称ばれるのも、その故である。「列女伝」を見ると、昭が、いかに当時屈指の賢才として遇されていたかが窺われる。著述として、『女誡』一巻が「列女伝」に収められている他、班固「幽通賦」、劉向『列女伝』にそれぞれ注している。新旧唐志まで記録のある『班昭集』もしくは『曹大家集』なる家集は、現在見られない。

四 「東征賦」——その独自性——

後漢、安帝永初七年（一一三）、班昭は息子曹成、字は毅、が陳留郡の長となつて赴くのに従つて、東征の途に着く。そのいきさつから「東征賦」は説き起こされる。

惟れ永初の有七、余子の東征するに随へり。孟春の吉日、良辰を撰びて将に行かんとす。乃ち趾を挙げて輿に升る。夕に予偃師に宿す。

旅路に着いた時日をまず明言する手法は、班彪「北征賦」にはなかったが、後の紀行賦では一般化する。潘岳「西征賦」も「東征賦」と同手巧であるし、遠く杜甫の詩「北征」も、これに倣う（吉川幸次郎『杜甫詩注』第四冊「北征」筑摩書房参照）。紀行文学を象徴する冒頭である。時に班昭は六十一歳。相当な高齢に達していた。この旅は、今日で言うなら転勤移動の小旅行といったところなのだが、事は二千年も昔、しかも老婦人の旅でもある。旅立ちに良い頃合を見て、と慎重極まりない出発風景の後も、待ち迎える旅程に向けて不安がつきまとう心境を綴る。以下、偃師県での長い

煩悶であろうか。

遂去故而就新兮。志信悵而懷悲。明發曙而不寐兮。心遲遲而有違。酌罇酒以弛念兮。喟抑情而自非。

「このまま住み慣れた地を離れ、見知らぬ地へと向かうことを思つて、わたしは心が落ち込んですっかり悲しくなつてしまつた。とうとう寝つかれぬままに夜明けを迎えたが、心はぐずぐず、決意と情とが背き合う。酒を酌んで、この未練を絶ち、ああと一声の嘆息と共に、京師への限りない惜別を抑えて自分を励ます。」

偃師県は河南郡、洛陽の三十里東方に位置する（『漢書』地理志）。「罇酒を酌みて以て念を弛うし」とうたう昭の頭に、漢初、蘇武の作と伝えられる詩の句「我一罇酒あり、以て遠人に贈らんと欲す。願はくば子留まりて斟酌し、此の平生の親を叙べよ」（『文選』卷一九/10a）が浮かんでいたのではないか。李善は『漢書』東方朔伝の「憂を銷すは酒に若くは莫し」という朔の語を引くのみである。昭自らも言う通り「遅遅」として湿っぽい感傷から一転、次には、思想を提示する。

諒に櫟に登りて蠶を椽たず、力を陳りて相追はざるを得てんや。且た衆に従ひて列に就き、天命の帰する所に聴す。通衢の大道に遵ひ、捷徑を求めて誰にか従はんと欲す。

『韓非子』五蠹篇に「上古の世、人民少かにして禽獸衆く、人禽獸に勝へず。聖人作る有り、木を構へ巢と為し以て羣害を避く、民之を悦びて、天下に王たらしむ。之を号して有巢と曰ふ」と。「登櫟」とは、人が櫟を作る工夫によつて、他の獸類から一線を画して歩み始めた出来事を象徴する。『淮南子』修務訓「古は人草を茹み水を飲み、羸蚌の肉を食へり」の羸は蠶と通じる。「椽蠶」とは、人間の食糧採集の生活。文明草創の頃、人は己れの身を護り、食糧を獲得し、まず生きることに関心を注がねばならなかつた。この一句、昭明太子「文選序」に言う「冬は穴にすみ夏は巢にすみし時、毛を茹ひ血を飲みし世」を想起させる。太子は、こういう太古の世を「斯の文未だ作らざる」世とも

言う。また李善は注して、曹植「遷都賦」の「乾元の兆域を覽るに、人と物と上世を本とす。紛混沌として未だ分たれず、禽獸と別無し。蠶螯を採ちて蔬を食ひ、皮毛を撫ひて以て自ら蔽ふ」という発想が、「東征賦」のこの句から得られたものであろう、と言っている。この段は、班昭の時代觀、文明觀の独自性を明らかに示している。今は太古の世とは違ふ。今は「歴とした文明の世」なのだが、文明の恩恵に安住してしまわずに、当代だからこそ文明人らしく正々堂々生きるべきだ、と勸奨するかにも見える。前段までの主情的な叙述との不均衡は目立つし、旅立ちの心境として適当か問われるところであるが、この六句こそは「東征賦」の展開する独自の世界への序言とも言ふべき部分に他ならない。「東征賦」の特色は、とりわけ濃厚な述志的要素に在る。その述志部は、賦の後半に固まるが、述志に入る前に、偃師県以東、河南郡の中の道行きを、班昭は呆氣ないほどに一気に語り終えてしまふ。

乃ち遂に往きて徂き逝きて、聊か目を遊ばしめて魂を遨ばしむ。七邑を歴て觀覽し、鞏県の多艱なるに遭へり。河洛の交流を望み、成阜の旋門を看る。既に峻嶮より免脱れて、滎陽を歴て卷を過ぐ。原武に食して足を息め、陽武の桑間に宿す。

溜め息一つを漏らすことさえない、この極端なまでの簡潔さも、意図あつたことだったのであろうか。次では、もう陳留郡の内へ到達してしまふ。

封丘に涉りて路を踐み、京師を慕ひて竊かに歎く。小人の性の土を懷んずる、書伝よりして有り。遂に道に進んで少く前み、平丘の北辺を得たり。

陳留郡封丘県は河南郡との境界近くに位置する。そこに到つて、ようやく羈旅の身の上らしく、都恋しい気持ちを言葉に表す余裕を示すのも、目的地への接近を実感してのことか。「小人の性の土を懷んずる」は『論語』里仁「君子は徳を懷んじ、小人は土を懷んず」を踏まえる。自らを「小人」と言いつつ、班昭の脳裏には、「君子懷徳」の実例が浮か

んでいたに違いない。以下、匡郭では孔子、蒲城で子路、蘧郷で蘧伯玉、と孔門師弟が想起され、いよいよ昭の述べんとする志が顕らかになっていくのである。

入匡郭而追遠兮。念夫子之厄勤。彼衰亂之無道兮。乃困畏乎聖人。悵容與而久駐兮。忘日夕而將昏。

「匡の邑まちに入って遠い昔の出来事を辿り、孔子が危機に陥くまって困くまんだ故事を考える。「陽虎などという無暴者の横行する」ああした衰えた乱世で正しい道も見失われていたから、こともあろうに聖人を包囲し畏れさせることになったのだ。うらめしさが尾を引いて、氣の向くままに匡に長居したが、早や夕刻で日が暮れかかっていることに気がつかなかった。」

『論語』子罕「子匡に畏す」と記される事件が、この条の下敷きになっている。陳への旅の途中で匡に過った孔子は、無暴者陽虎（陽貨篇）の陽貨と勘違いされて、匡人に拉致される危難に遭ったのであった。

到長垣之境界。察農野之居民。睹蒲城之丘墟兮。生荆棘之榛榛。惕覺寤而顧問兮。想子路之威神。衛人嘉其勇義兮。訖于今而稱云。

「長垣ちやうえん県に差しかかって、田畑で働く農民のさまをつぶさに見る。蒲城の荒れ地の、いばらがみっしりと生えているの
に思わず目を見張り、ハッと我に返って子路とこの蒲城との因果を思い返す。子路は堂々として怖れを知らず、衛人はその勇氣と義とをほめ、今もって称え祀り続けていることを思う。」

子路は蒲邑の大夫であった（『史記』仲尼弟子列伝）。『論語』陽貨に、子路の「君子勇を尚たうとぶ乎」との問いに答えた孔子の言葉として「君子勇有りて義無なければ乱を為し、小人勇有りて義無なければ盗を為す」とある。子路は、孔子弟子の中でも勇に勝った人物だが、義も兼ね具えていた。「だからこそ、衛のお家騒動の際、毅然とした行動がとれたのだ」と、今、衛人の裔、蒲邑の民が祀り続けているのを眺めて、班昭は、徳の不滅に対する信頼を強めたようである。ここで、

表面には出ていないが、「小人」の「盗を為す」者として、さきの孔子受難の元凶、陽虎が連想されていたのではないか。孔子が書いたという「春秋経」で陽虎を「盗」と呼ばれる。「今に訖るまで称して云ふ」も『論語』季氏「民今に到るまで之を称す」に拠る表現。匡郭、蒲城ともに李善引く『史記』仲尼弟子列伝の徐広注に従って、陳留郡長垣県の邑名とする。

同じく長垣県の蘧郷は『陳留風俗伝』（『水経』濟水注引）に「蘧伯玉の冢あり」と記す通り、蘧瑗、字は伯玉、の故地である。

蘧氏 城の東南に在り、民亦た其の丘墳を尚ぶ。

長垣県は春秋の衛の領土に入る。それこそ衛の大夫であった蘧伯玉は、孔子が尊敬する人物として「衛に於ては蘧伯玉」（『史記』仲尼弟子列伝）と名を挙げたほどの賢者であった。班昭が、衛に縁あり、徳ある古人として回顧するのに、いかにも適格と言えよう。

孔子、子路、蘧伯玉、この三名を通して、班昭の言おうとしたことは何か。言う。

唯だ徳をして不朽為らしめ、身は既に没すれども名は存す。惟れ經典の美むる所、道德と仁賢とを貴くす。

と。「令徳爲不朽兮」は『左伝』襄公二十四年に叔孫豹の説く、いわゆる「三不朽」に基く。さらに「身既没」は『論語』子罕「文王既に没す、文茲に在らざらんや、天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後死の者、斯の文に与かることを得ざる也。」に拠る。これは、前に引いた「子匡に畏す」に続けて見える、孔子の、人間文化の永遠不滅、文化の、暴力に対する必勝、への確信を示す言葉である。この条を借りて、班昭は自己の「不朽觀」ともいべき思想を示しているのではないか。その文化不滅への信頼は、しかも、「經典」を根拠とする、と自ら言明した班昭の文化觀の底には、經典の賞揚する徳が具わってこそ文化であり、それ故の不滅なのだ、という意識がある。そこで、徳の失われた場合を

示して言う。

呉札は君子の多きを称へ、其の言信にして微有り。後に衰微して患に遭ひ、遂に陵遲して興らず。

舞台はやはり衛である。『左伝』襄公二十九年に見える記事、呉の公子季札が衛を訪れた際、蘧伯玉はじめ君子が多数いることを嘉して、衛の安泰を予言した事、に班昭は二重の同意をしている。すなわち、衛に縁ある君子は多いことに對して、かつ、「君子がいるうちは大丈夫」と条件つきで称えたことに對して。「其言信而有微」も『左伝』昭公八年に拠る。後者の同意の「微」として、君子が没した後、衛の尻すぼみに凋落したことを言うのは、『史記』衛公世家に拠る。この一条を、孔子から蘧伯玉までの、徳名不滅の挙例の後に附加することによって、現在の長垣県という地を拠る所に、一見連絡のない故事を綴ってきたかのような一段が、衛国の変遷というたて糸を鮮明にして完結する。しかし、衛の歴史に取材しながらも、これはあくまでも班昭の思想展開の一環であることに、意義があるのである。ここで〈經典〉を揺るぎない背景として堂々と自分の見解を叙べる手巧が出現したが、それは、以後一層顕著となり「東征賦」を特徴づける。

知んぬ 性命の天に在り、力め行ふに由りて仁に近づくことを。勉めて仰高して景を蹈み、忠恕を尽くして人に与す。正直を好みて回はず、精誠なること明神に通ず。庶くば、靈祇の鑒照し、貞良を祐け信を輔けんことを。

第一句「知性命之在天」は『論語』顔淵「子夏曰く、商之を聞く。死生命有り、富貴天に在り」に拠り、「由力行而近仁」は『礼記』中庸「子曰く、学を好めば知に近く、力めて行へば仁に近からん」に拠る。「仰高而蹈景」は『毛詩』小雅車牽「高山は仰ぎ、景行は行く」に、「盡忠恕而與人」は『論語』衛靈公に子貢の「一言にして以て身を終るまで之を行ふ可き者有り乎」との問いに孔子が「其れ恕乎」と答えた記事があり、また『老子』第七十九「天道親無し、常に善人に与す」とあるのに基く。また『毛詩』小雅小明「爾の位を靖恭し、是の正直を好せよ」、大雅旱麓「豈弟の君

子、福を求むる回はず」に拠ったのが、「好正直而不回兮」。最後の二句こそ『楚辭』に典故を得ているが、六句を徹底して經書の言葉にもとづいていることは明らかである。なお、「精誠通於明神」について李善は『文子』「精誠形に通じ、氣を動かすこと天に於てす」を引くだけだが、班彪「王命論」(『文選』卷五二)に「精誠神明に通ず」とあつて「明神」と「神明」が顛倒している以外、全く同じである。さて、これほどにも由緒ある言語を用いて班昭は、現在の自分の処世觀を述べているのであるが、それは概ね「各人には各人の寿命がある。この世に永らえている今は、ただ仁をめざすのみ。人と接しては思い遣り、自己の内では真つ直ぐに。天地神明に恥じぬ生き方をしよう」というものらしい。こういう考えは、東征を経験する前から、班昭の信条として在ったに違いない。しかし、この旅征を通じて、とりわけ長垣県の道行きに於て、古の有徳者を回顧するに及んで、後漢の安帝永初当時を生きる者としての処世思想を再確認し得た。述志の賦と言っても通用するほど述志の要素の大きい「東征賦」の、その「志」は、やはり東征を経験したからこそ、はじめて昭の言葉として表現され得たもので、紀行賦と呼ぶのがふさわしい。

「北征賦」同様、この賦も「乱」を附す。

乱に曰はく、君子の思は必ず文を成す。蓋ぞ各々志を言ひて古人を慕はざる。先君行止して作有り、其れ不敏なりと雖も敢へて法らざらんや。貴賤貧富は求むべからず、身を正しうして道を履み、以て時に俟つ。脩短の運は愚と智と同じ。靖恭して命に委す唯だ吉凶のままなり。敬み慎みて怠ることなく謙約を思ふ。清静少く公綽を師とせんと欲す。

と。開口一番「君子の思は必ず文を成す」と言い、「志を言う」、「古人を慕う」と言うのは、この賦に於て、班昭が「述志」を企図したことを裏づける。父、班彪を「先君」と呼んで「北征賦」の存在を示した上で、「自分は自分なりに、この賦を作ってみた」と告げる。父には父の創作があり、子には子の創作がある。班昭は、紀行賦というジャンルを踏

襲しながらも、当初から自己流の紀行賦を心がけ、そして仕遂げた。旅征の通過地と、史実と、情・志との融合。単に「今に感じて、古を思う」に止めず、さらに、根底で己れを文学創造に向かわせている「志」を確実に表明することが、紀行賦の分野でも可能なことを、班昭は実証している。そしてこれは同時に彼女の文学観を積極的な形で反映している、とも言える。つまり文学の根本理念、「詩言志」の意識が、ここに窺えるのである。賦は、もはや、前漢末期、自らも一度は辞賦創作に心を傾けた揚雄をして「童子にして雕蟲篆刻す、壯夫にして爲さざるなり」(『法言』吾子篇)と絶望の嘆声を挙げしめた頃の、文人の余戯ではなく、それ自体を目的として創作される正統な文学である、との意識が動かぬものとなっていたことを印象づける作品なのではあるまいか。終盤六句も、積極的発言と受けとめたい。「貴賤、貧富」、「生命の長短」などは人力の及ばぬ、太古以来の人間の自明の事柄であるから、そのあるままに生きる。ただ古聖賢の訓えに倣って、身を正しくして生きて、あとは時のめぐり来るのを待てばよい。「身は没すれども名は存す」という实例を、あの通り見てきたではないか。——班昭の文明永続、不朽なるもの、への確信が、ここにも如実である。これは、決して安易な天まかせ、運まかせの態度ではない。

五 班氏「紀行」二賦の価値

紀行を契機に、紀行の実体験に取材して作られた賦である点では、「北征賦」と共通し、かつ「北征賦」を十分に意識した上での「東征賦」であるが、以上見てきた通り「北征賦」にはない独自の境界を拓いている。私は、そこに、班昭の生きた時代状況が大きく作用しているものと思う。すなわち、後漢も、六代安帝の初め頃には、比較的安定した政権の続いてきた後を承けて、二百年を通じて最も平穏な時期と言える状況であった。しかも、何かと武張った前漢と異なって、皇帝が首唱して文教政策を推進したほどであるから、思潮そのものも相当に文化的な熟成を遂げつつあった

(内藤湖南、前掲書参照)。「東征賦」は、まさに、この太平の世を背景に持っているのである。賦の中で述べられる班昭の文明意識、不朽観、処世観、は、まず昭の生きた時代の安定を前提としてこそ、表明され得たものだった。

文学の価値の一つに、時代時代を映し出している、ということを確認するならば、「東征賦」は見事に「文学」の成果を収めている。時代を映す、とは言い替えば、文学は時代によって変遷、変容する、ということである。「文選」収める紀行賦も、決して一味ではない。それは一篇一篇に独自の文学的価値が具わっていることの表れである。「北征賦」は、班彪が青年で遭遇した時代ならではの紀行賦であり、「東征賦」は、班昭が老年を生きた時代ならではの紀行賦であった。そして、紀行賦に於ける、質の変容は、より巨視的に考えれば、辞賦文学全体の変容の一端、と言えるのではなからうか。共時的興味である。さらに詳しい検証をこころみたい。そのためにも、一層『文選』収める紀行賦の三篇め、「西征賦」の検討が急がれるが、次回に譲る。

以上で、私なりに班氏父娘の紀行賦が個々の価値を見出せるものであることを、明らかにできたと思うが、さらに、もう一言付け加えておきたい。「東征賦」、「北征賦」二篇の小品である点と、典故がかなり徹底して経書類に拠った言葉使用である点とは、密接な関連がある。博学を背景とした叙事・列挙の文学、という辞賦の定義は同じでも、前漢の辞賦は、やや手あたり次第、力まかせの列挙に頼ったものであった、と見ることができる。博学の、内容及び質よりも、量的な面が偏重されていたのではなからうか。そういう博学は際限がなく、汲々とさせられる割には無意味で、次第に空回りになっていく。揚雄の見限りをつけた辞賦とは、概ね、そんな状態の昂じたものだったのであろう。ところで、班彪、そして班昭は、まず経学を根底として博学であったことは既に述べた。彼らは考えたに違いない。千の、雑駁な知識に基いた言葉より、一つの、経書に拠った言葉の方が、いかに雄弁であるか、己れの意を達するのに有効であるか。これは、学問への信頼が、兩人、殊に班昭に到って、強固となってきた事情を反映しての見解であった。後

漢期は、やがて鄭玄を得て經学の画期を形成することになるが、それまでの熟成過程に、おそらくは相当真正面から関わっていたに違いない班氏父娘の、文学作品であるからこそ、後々、各時代に於ける最流行の文学形態は変化交替しても、引き継いで踏襲され続けた、学問と文学との相乗を基幹とする中国文学特有の型の、極く初めの実現が成され得たのである。

〔附記〕

なお、「北征賦」、「遂初賦」については、伊藤正文「所謂〈紀行〉賦について―遂初賦〉〈北征賦〉をめぐる―」（『小尾博士古稀記念中国学論集』）に、また班昭以降『文選』未採録の紀行賦の流れについては、同「統所謂〈紀行〉賦について―述行賦〉をめぐる―」（『岡村教授退官記念論集中国詩人論』）に、それぞれ詳論があり、同「漢代文学抒情化と〈文心雕龍〉―漢賦をめぐって―」（『古田教授退官記念中国文学語学論集』）と併せて、大いに参考させていただいた。